

金本位制における「貨幣」の意義

鈴木芳徳

目次

- 一 はじめに
- 二 市場機構と貨幣論
- 三 「貨幣としての貨幣」
- 四 金本位制度の逆倒性
- 五 むすび

「貨幣の世界では事態の動きは急である。だからといって、原理が即座に変わるわけではない。」（ケインズ『貨幣改革論』、フランス語版への序文）

一 はじめに

貨幣論の組み立てを問題にして、そこから金本位制度の仕組みを考えてみたい。

従来の貨幣論は、あるいは『貨幣』なき貨幣論であったのではないか、したがって金本位制への理解も漠然たるものに止まらざるをえなかったのではないか、ここから小論は出発する。

問題の要点は三つである。予め示しておくことが便利であろう。

第一。これまでの貨幣論は、貨幣について、ともすると商品流通に直接的に随順する被規定性、順応性、消極性、受動性、中立性を指摘するに止まることが多かったのではないか。しかし、流通貨幣の世界にのみ視野を限り、商品流通による直接的被規定性のみをいう貨幣論は、事柄の半分しか見ていないのではないか。

『資本論』の著者の思考に即していうなら、彼は、貨幣が△商品流通に随順する▽ものであることを主張したかった訳ではあるまい。彼が言いたかったことは、恐らく、貨幣が△商品流通に被規定の存在でありながら、自立の存在たりうる▽という逆説、この自立に至る曲折にみちた論理をこそ言いたかったのではあるまいか。この逆説を了知しうるか否かは、その出発点に据えられる△商品流通▽そのことの理解いかにかわる。もとより単に「取引貨幣」と「資産貨幣」とを平面的に羅列することはいとたやすい。しかし、求められているのは、「流通貨幣」と「貨幣としての貨幣」との逆説的關係の理解である。

そもそも、貨幣が商品流通に被規定の存在だということだけのことであれば、すでに古典学派に周知のことからであった。『資本論』は、なるほど古典学派の肩の上に乗っている。乗ってはいいるが、『資本論』はこれに同じることをもつて書かれたものではなからう。『資本論』を、古典学派の亜流であるかに読み解き、古典学派の擁護者であるかに説く

のは、誤りである。『資本論』の本旨は、古典学派「批判」にある⁽¹⁾。

右で、「批判」という言葉を用いたが、由来、認識とは、批判的認識以外ではありえない。対象を客観化し、相対化して位置づけ、その意味を問い、その独自の意義を尋ねる、つまり対象を物象化の或る次元に置く、という以外に、認識ということはありえない。したがって、批判的認識のためには、自らの物象化の体系を積極的に提示するのなければならぬ。それこそが、最も根底的な批判である。

ここでは『資本論』の提示する物象化の体系を、貨幣論について見る。それもごく大づかみに見る。鳥の目をもって大局的に見るのでなければ、肝腎の全体構図が見えてこないからだ。

考えてみると、貨幣に関する既往の諸学説への批判は、すでに『経済学批判』における「流通手段および貨幣にかんする諸学説」において示されている。注目すべきは、そこに、「流通手段」と並んで「貨幣」が併記されていることである。

すなわち、『資本論』における貨幣論の論理構成上の大きな特徴は、「貨幣の第三規定 (die dritte Bestimmung des Geldes)」たる、「貨幣 (Das Geld)」ないし「貨幣としての貨幣 (Das Geld als Geld)」が存在するところにある。

いうまでもなく、富としての貨幣把握、やや一般的な表現でいえば「資産貨幣」としての貨幣把握は、すでに重商主義以前から行われていた。かつて行われていたこの「資産貨幣」としての貨幣把握を、商品流通の上に位置づけて見せたもの、これが『資本論』にいう「貨幣ないし商品流通」なのである。

右の論理構成の含意を読み解くこと、これが小論の第一の課題である⁽²⁾。

第二。ここから直ちに第二の問題が問われる。すなわち、「貨幣としての貨幣」とは何か、の問いである。

「貨幣としての貨幣」は、それ自体としていえば、自然物としての金 ∇ である。その金属存在そのものが「貨幣」とされ、そこではあらゆる形態規定は消滅している。すなわち、社会関係の帰結として生じた筈のものでありながら、あらゆる社会的過程はその軌跡を残していないのである。

かかるものとしての「貨幣としての貨幣」を内容的に理解するに際して、必要不可欠な視点は次の二つである。第一に、金をもって至上の善とし、富の絶対的形態とする「貨幣としての貨幣」は、幾層もの呪物性に覆われた存在だという認識が必要である。第二に、それは、商品から貨幣へ、という範疇生成の論理的な流れに基礎づけられているとはいえ、商品から貨幣へという貨幣生成の経緯をもってしては直ちに推し量ることのできぬ、新たな論理次元に位置するものであり、直截にいえば、商品流通を論理的前提としつつ、流通外に、流通の否定態としての退蔵貨幣の生成をふまえることなしには、成立しがたい問題領域であって、ここでもなによりも求められるのは、商品の理解そのこととでなく、商品流通についての深い理解だ、ということである。

第一の呪物性について考えてみる。この「貨幣としての貨幣」という貨幣の完成形態にあっては、金属存在それ自体が貨幣とされる。問題は、この呪物性の表皮を一枚、剥ぎ落したとき、その中に見えるものは何か、である。それは、単なる \wedge 価値物としての金 ∇ 、 \wedge 労働生産物としての金 ∇ ではあるまい。仮りに、これが \wedge 価値物としての金 ∇ であったとすると、それは \wedge 価値物としての金 ∇ を \wedge 価値物としての商品 ∇ とシンメトリカルに対置してものを考えるようであることを意味するのであるから、この発想は、恐らくは産業循環をシンメトリカルな循環として解くことを意味しよう。しかし、かの価値形態論以来の論述をふりかえってみると、そこでの強調点のひとつは、 \wedge 貨幣は商品である ∇ という素朴労働価値説をのりこえようとする点にあり、「貨幣商品は……その独自の社会的諸機能から生ずる一つの形態的使用価値を受け取るのである。」（『資本論』第一篇第二章）と述べられ、また、「一般的等価値物として排

除された商品は、……一般的交換手段であるというだれにとっても同一の使用価値をもっている。」(『経済学批判』、第一章)ことが主張されている。

すなわち、「貨幣としての貨幣」の本体を△価値物としての金▽において理解することは、△商品と区別されたものとしての貨幣▽についての理解を排除しかねない弱点を有しているのであって、平たくいえば△いつでも、どこでも、何にでも▽買い向えるという貨幣に独自の一般的使用価値を見失わせるものということができる。この点は、商品と貨幣とのアシンメトリーな関係を理解するうえで枢要のポイントである。

第二に、その「貨幣としての貨幣」は、何よりもまず退蔵貨幣として存在する。それは流通「外」の貨幣であり、流通の「否定態」である。貨幣は、ほんらい、流通の中で生成し、流通の中で機能する筈のものでありながら、流通「外」の「否定態」が、貨幣の完成形態だとされるこの逆説、これが問われるべき問題である。「否定態」の貨幣こそが「貨幣としての貨幣」とされ、至上の善とされるこの逆説は、貨幣制度が根源的にもつ逆倒性として表現される。ここは、貨幣理論における最大のアポリアであり、貨幣制度論における最大の難所である。そしてその理解は、分断のリスクにたえずさらされているものとしての商品流通への深い理解を前提としてのみ可能となるものであるに相違ない。

第三。ここから金本位制度の理解が問われてくる。金本位制度が貨幣制度のひとつであるかぎり、右の逆倒性の貫徹はまぬがれがたいところである。金本位制度を、金が価値尺度である本位制度といった程度の漠然たる理解に止まらしめるわけにはいかない。仮に、右に述べたような逆説が金本位制度に貫かれているとすれば、金本位制をもって、生来、自律的安定性において万全無比のもの、と説くわけにはいかない。金本位制が生来有する困難はどこにあるか、

金本位制度において貨幣制度の逆倒性はいかに表現されているか、これらが逐次、問われねばならぬのである。

(1) ケインズはマルクスをリカード経済学の継承者と考え、古典学派に準ずるものとして扱っている。一九三五年の George Bernard Shaw 宛ての手紙の中に、「マルキシズムのリカード的基礎」という表現がある (Cf. *Poverty in Plenty: Is the Economic System Self-Adjusting?*, in *Collected Writings*, XIII, p. 485)。

(2) さきに別稿で、「利子論なき信用論」の不都合を指摘したが、小論はこれと響き合う側面を有しており、別稿にならって言えば、小論は『貨幣』なき貨幣論」の不具合を指摘するものとなっている。のちに述べるように、『貨幣』なき貨幣論」は、貨幣経済理論としての完成への道を塞ぎ、貨幣制度の理解を妨げ、貨幣政策を理解するための足がかりを見失わせるものである。拙稿「信用理論の基本構造(一)〜(四)」(神奈川大学『経済貿易研究』、第十二・十三合併号、十四号、十五号、十六号、一九八七年〜一九九〇年)参照。また、世界貨幣については、拙稿「世界貨幣論史管見」(神奈川大学『経済貿易研究』、第一七号、一九九一年)。

二 市場機構と貨幣論

まず、市場機構の理解から出発しよう。

古典学派は、市場機構を通して、経済の全過程が調整されると考えた。市場において需給が突き合わされ、数量も価格も、揺ぎを見せながら調整される。揺ぎは、調整過程で押し戻され押し返されて、永い目で見れば均衡線に収束する。予定調和という、市場への信頼がそこにある。つまり、収束し収斂するものとしての過程認識、それは経済の全過程についての自律性の認識に支えられてのものである。

かくて古典学派は、 $W-G-W$ を、 $W-G$ と $G-W$ との即自的統一と見るのであって、流通過程を「過程的統一」においてとらえる。すなわち、ポートは揺れるにしても、転覆に至る心配はなく、無事に進行してゆく、と見る訳である。供給とは需要のことであり、売りとは買いのことである、という。供給が需要を作り、売りは買いを伴う、と

いうのである。勿論、時には売り急ぎや買い急ぎ、あるいは売り惜しみや買い控えのときが生じ、過高評価や過小評価、つまりは不等価交換も生じよう。しかし、数量調整や価格調整といった自己調整メカニズムが市場機構に備わっている限り、それらは時とともに収束に向うに相違ない。かくて貨幣は、商品流通の影にすぎぬと見られよう。市場の自律調整メカニズムを絶対視するかぎり、貨幣は流通貨幣で足りる。貨幣理論は流通貨幣論に尽き、つまりは「貨幣ベール観」に至る⁽³⁾。

ところで、『資本論』に立ち返ってみると、『資本論』の著者の眼前には、大別して二様の貨幣学説があった。

第一は、古典学派以前の、重商主義的な貨幣理解である。金こそが富であり、金の獲得こそが富の獲得であるとする、この単純にして素朴な貨幣理解の下では、金こそはアプリオリに拝跪さるべき対象、尊崇に値する価値とされた。第二は、古典学派の貨幣理解である。それは、価値の源泉を労働に求め、商品流通に随順するものとして流通貨幣を見、ここに立って重商主義の迷妄を「合理的に」解き明してみせた。アプリオリに金を富とする迷妄は完全に解体され、その信仰は地に堕ちる。

『資本論』の著者は、これらをどう見たか。彼は、一方では古典学派のいうところに同調する。市場機構の調整メカニズムの理解にも賛成する。調整は、社会的過程たる流通過程を通じて、個々の生産過程に及んでゆく。それは、個別に投入された労働の、たえざる社会的再評価過程でもある。こうした意味からすれば、『資本論』は、古典学派の衣鉢をつぐものといってよい。しかし、にも拘らず、古典学派の「合理的な」説明では、自立的存在としての貨幣は解けない⁽⁴⁾。

『資本論』の著者の生きた時代は、古典学派のそれと大きく異なっている。古典学派は、総じていえば、マニユファクチュア段階の経済学説である。しかし今や、産業革命が進展し、工場制工業が広まり、固定資本が大規模化して、

産業循環 (business cycle) が生じてくる。価格調整とか数量調整とかいうのは、経済の揺ぎが或る域値のうちにあり、偶発的かつ部分的であるにすぎぬ場合のことである。いまや単なる数量調整、価格調整ではとうてい覆いつくせないほどの全面的破綻——恐慌が生じてくる。W—G—W が完全に分断されるわけだ。⁽⁵⁾

しかし古典学派は、恐慌を知らない。⁽⁶⁾ 歴史の事実としていえば、循環性恐慌は一九世紀の初頭にはじまる。また、古典学派の末裔は、この新たな歴史の事実に目を塞ぎ、形式化され教條化された既往の学説に執着する。

すなわち、古典学派と『資本論』との間には、W—G—W のはらむ緊張の質と程度について、決定的な認識の差がある。古典学派は、W—G—W を、W—G と G—W との即自的統一、すなわち「過程的統一」においてこれをとらえたが、『資本論』は、その統一が決定的に打ち破られ、分断される可能性を見て、W—G—W を \wedge 過程的運動 \vee においてとらえた。単なる数量調整や価格調整では補修できぬほどの分断、この分断の可能性があるとすれば、W—G—W への信頼は一挙に相対化されよう。商品は貨幣を恋慕うものの、まことの恋はなめらかなには進みがたい。W—G—W への信頼の相対化は、ひるがえっていえば、「貨幣としての貨幣」への絶大なる信頼である。W—G—W なる運動空間が不確定性に満ちているとなれば、その埒外にある「貨幣としての貨幣」は、いっそう不動の存在のごとくに目に映る。それは、W—G—W の帰趨と関りなく、不動の価値をもつかに見えてこよう。

ここにおいて、貨幣生成の過程と根拠は、何処にか消え去り、ただ認められるのは、富のいつでも出動可能な、絶対的で社会的な力としての貨幣である。流通において機能するものこそが貨幣であるべきはずのところ、流通の否定態においてこそ貨幣は貨幣とされ、逆に、流通する貨幣は \wedge 現世における仮りの姿 \vee になりおおせるのである。

このように、W—G—W の世界が、完結具足の自律空間たりえぬことの認識がなければ、「貨幣としての貨幣」は理解できぬ。逆にいうと、W—G—W をもっぱら「過程的統一」においてとらえた古典学派は、流通貨幣についての認

識に止まるしかなく、そこから「貨幣としての貨幣」に至る道はついに見出されることがなかったのである。

ここに明らかなことは、同じく流通の動態認識とはいっても、古典学派は、収束に向う秩序への過程として動態を見たのであって、いわば \wedge 曲線に沿って \vee 事態は進むと考えたのに対し、『資本論』の著者は、或る曲線から別の曲線に突如とび移る非合理のポテンシャルを秘めたものとして流通の動態を見たのであって、つまり \wedge 曲線がシフトする \vee ケースのあることを見逃がさなかったのである。かくて、「貨幣としての貨幣」の認識は、恐慌についての認識のとらえ返しとしての側面をつよく持っており、したがってそれは、遙かの次の次元における「貨幣資本蓄積」についての認識を遠景に見てのものである。⁽⁷⁾

ここで立ち止って、右に述べた事柄をいったん整理しつつ、若干、敷衍しておきたい。右では、 $W-G-W$ に常に分断の可能性があるという点を、「貨幣としての貨幣」が生ずる必然性の拠点と考えた。しかしもとより、その陰には、流通貨幣として用いられるがゆえに「貨幣としての貨幣」たりうるという可能性の側面がある。そしてさらに言えば、「貨幣としての貨幣」たりうるが故に、その貨幣は流通貨幣たりうるものであり、「貨幣としての貨幣」を欠いては、商品流通そのことが成り立ちえないのである。——つまり、「流通貨幣」と「貨幣としての貨幣」とは緊密にして不可分の相互予定的関係にあるのであって、後に見るところであるが、貨幣制度なるものは、流通貨幣のみを掌握すれば足りるわけのものではないのである。「貨幣としての貨幣」は、貨幣制度を論ずるにさいして、逸することのできぬ要素の要素であり、また、流通手段貨幣は「貨幣としての貨幣」を欠いては存立しえぬものであることを確認しておきたい。⁽⁸⁾

(3) スミスはいう。「人々が貨幣を欲求するのはそれ自体のためではなくて、自分たちがそれで購買しうるもののためなのである。」(『諸国民の富』、第四編第一章、岩波文庫(三)、大内・松川訳)

リカードはいう。「生産物は常に生産物によって、あるいは勤^{サツ}勞によって、買われる、貨幣はたんに交換を果すための媒介物にすぎない。」(『経済学及び課税の原理』、第二十一章。『リカード全集Ⅰ』、堀経夫訳)

(4) アダム・スミスの貨幣論は、のちに銀行学派へと引き継がれて大きな影響力をもった。スミスは、 $W-G-W$ を過程的統一ととらえ、その上に手形流通を乗せて理解し、ここに手形流通が絶対化された。真正の手形 (real bill) であるかぎり、支払手段貨幣はいらない、よしんば支払手段貨幣が必要であるとしても、それは手形流通のための支援装置にすぎず、支払手段貨幣に正当な地位は与えられない。すなわちスミスは、「クレディット・システムのモネタール・システム (兌換) からの相対的自立をあきらかにした。」(中村廣治「スミス貨幣・信用理論の研究」、『大分大学経済論集』、第一六卷四号、昭和四〇年三月) これを継いだ銀行学派 (banking school) は、例えばトウクに見られるように、「貨幣としての貨幣」のほとんど全ての側面を経験的事実として知っていたにも拘らず、その理論的位置づけを欠いていた。そのため、銀行学派にあっては、貨幣制度というものがついに理解されえなかったのである。

(5) くり返す恐慌を、古典学派のいう自律調整メカニズムを少し拡張した中に解け込ませてしまおうとする考え方は、私は疑問だと思っている。恐慌は、古典学派のいう自律調整メカニズムを越えるものとしてとらえられねばならない。

(6) リカードはいう。「ある特定商品の生産が過多であって、それに支出された資本を償わないほどの供給過剰が市場に起こるかもしれない。しかし、このことがすべての商品にかんして事実であることはありえない。」(『経済学及び課税の原理』、第二十一章、『リカード全集Ⅰ』、堀経夫訳)

(7) 古典学派と『資本論』との対抗関係は、新古典派とケインズとの対抗関係と実によく似ている。マルクスもケインズも、その所説は、貨幣的経済理論としての性格を濃厚に持っており、一定の共通性を有している。

ケインズについていうと、彼が一九三四年、「豊富の中の貧困——経済体系は自己調整的か?」と題する論文の中で、「経済体系は自己調整的ではない。」と結論したこと含意は極めて大きい。(Collected Writings, XIII, p. 485)

(8) 以上のことから、一国民経済を流通貨幣のみをもって満たすことの誤りが知られよう。「貨幣としての貨幣」の存在する理論空間を加えるのでなければ、国民経済は成り立ちえない。

三 「貨幣としての貨幣」

「貨幣としての貨幣」とは何か、その理解には幾重もの困難が待ちうけている。ここでは、問題を二つに分けて考える。

第一に、「商品流通」と「貨幣としての貨幣」との関係をどう理解するか、の問題がある。

第二に、これを受けて「貨幣としての貨幣」をどのようなものとして理解するかの問題がある。これら二様の問題を順序を追って検討しよう。

第一。ここで注意すべきは、「商品流通」と「貨幣としての貨幣」との関係を、同一平面において連続的にとらえ、それとこと足れりとする危険の存在することである。すなわち、「貨幣としての貨幣」を、商品流通の論理の直接的延長上にとらえ、両者の間に断絶を見ず、「貨幣としての貨幣」を商品流通に役立つもの、これに奉仕するもの、有用なものとして、「貨幣としての貨幣」の機能上の有用性をもってその意義を明らかにしようとする場合がある。

もとより「貨幣としての貨幣」は、確かに商品流通と直接・間接に機能上の連関をもつものであることはいうまでもない。例えば、(一)、退蔵貨幣は、商品流通の拡大・縮小に呼応するプール (Reservoir) として、収縮と膨張とをくり返す。(二)、支払手段貨幣は、商品流通の拡大、手形の増加に呼応して増加し、債権債務の相殺範囲の拡大に応じて節約が進み、銀行制度の下での貨幣節約技術の深化に伴って、より社会的効率的利用が進展する。(三)、世界貨幣にしても、国際商業の拡大に呼応して増加し、外国為替の仕組みとともに節約が進む、など。

しかし、ここでより重要なのは、「貨幣としての貨幣」が商品流通の論理の直接的延上にあるのではないという認識、換言すると、むしろ質的に切れた存在であることの認識である。この認識なしに「貨幣としての貨幣」の自立性についての理解をわがものとすることは不可能だという点である。

すなわち、恐慌下には、「貨幣としての貨幣」は、商品流通に対峙するものとなる。恐慌下には、全てのものが売れ急ぎをはかり、商品への需要は激減し、「貨幣そのもの」への需要のみが著増する。(一)、 $W-G-W$ の分断が予感されるや、この流通世界に見切りをつけるものが激増し、頼れるものは「貨幣そのもの」のみ、という事態にたちいたる。「貨幣そのもの」を抱いて退蔵し、流通世界から身を隠すものが増加しよう。(二)、掛売りや掛買い、そして手形流通が切れぎれになれば、支払手段貨幣が何よりもまず求められよう。(三)、世界市場恐慌ともなれば、世界市場には「ただ貨幣だけが商品だ!」という声が響きわたり、世界貨幣への需要は急増しよう。以上、総じていえば、恐慌下では、資本循環が停止し、商品流通が途絶する中で、商品ならびに資本の価値破壊が進行し、排他的な富であるところの「貨幣そのもの」への需要が急増する。資本循環が停止して雇用は急減するが、他方で需要が拡大する「貨幣そのもの」の側でこれを埋める雇用増が生じることは無い。それが流通外存在で、再生産と結びつきようのないものである以上、あまりにも当然のことである。このように、恐慌下における $W-G-W$ の裂け目においてこそ、「貨幣としての貨幣」存立の必然性は明らかとなる。

すなわち、「貨幣としての貨幣」なる規定は、決して商品流通に機能的に奉仕し、支援し、役立つということから、直接に生じてくるのではない。そうした連続的把握は、商品流通から「貨幣としての貨幣」が生じうる可能性を見るに止まる。商品流通 $W-G-W$ が、たえず分断のリスクにさらされていることから、「貨幣としての貨幣」を必然とする、という理解に立つのではないかぎり、「貨幣としての貨幣」の外在的自立性は理解できない。ここで問われているのは、商品流通 $W-G-W$ に対して、いわば超越者の立場に立つものとしての、換言すれば意のままにならぬ絶対他者としての「貨幣としての貨幣」を、いかなる必然性において理解しうるか、なのである。このことは、のちに貨幣制度の機構的理解にさいして、決定的な意味を持つてくる。

第二。右に述べたことは、基底にたつ商品流通 $W-G-W$ に、たえざる分断のリスクを認め、これを前提とすることによってのみ「貨幣としての貨幣」に位置を与えることができる、ということであった。そこで次に、このリスクを受けとめる「貨幣としての貨幣」についての認識が、これと相即したものであることが求められる。「貨幣としての貨幣」とは何か。

「貨幣としての貨幣」においては、金の呪物性が全てを吸収し、全てを覆いつくす。求めらるべきものは金、持つべきものは金、金こそは至上の善。ここでは、「貨幣」生成のあらゆる経緯とその形態規定性とは、自然物たる金 \parallel 金属存在としての金、の中に吸収されて、外からうかがい知ることとはできない。この呪物性こそ、意のままにならぬ絶対他者としての「貨幣」の無内容性とその運動エネルギーの無方向性の根源である。

そこで問題は、この呪物性の中にひそむものは何か、である。呪物性を剥ぎとったあとに露呈されてくるものは何か、である。

問題をいま一度、丁寧に整理してみよう。

「貨幣としての貨幣」にあつては、物象化された社会的関係が、自然物としての金なる「もの (Ding)」に内属する自然的な「属性 (Eigenschaft)」として現象している。問題は、この「もの」に秘められたところの「物象化された社会的関係」を、何ととらえるかである。さらにいいかえるなら、例えば、価値尺度は観念上の金で足り、流通手段は象徴としての金で足りるのに対し、「貨幣としての貨幣」は現身の金でなければならぬ、という際の現身の金の中に秘められた「社会的関係」を何と考えるか、が問題である。

それを、直接に「価値物」ととらえ、あるいは「労働生産物」ととらえることが適切か否かである。もとより、金

本位制下にあつて「貨幣」は金であり、従つてそれが価値物であり、労働生産物であることは疑問の余地がない。しかし、貨幣は商品とは區別された存在であり、その点においてこそ貨幣は貨幣となる。貨幣が貨幣たりえている特質を、たんに価値物たることに求め、労働生産物たることに求めるのであれば、貨幣論は不要である。何故なら、商品で商品は買えない、現実があるからだ。貨幣が貨幣たるゆえんは、それが価値物であり、労働生産物であることを内に含むとしても、そのこと自体に求めることは誤りである。価値物であり労働生産物であるということを、ひとつ越えたところに、貨幣の貨幣たるゆえんを求めるのでなければ、商品と貨幣とのアシンメトリーを解き明かしたことはない。⁽⁹⁾

念のために、次の文章をひいておこう。

「尺度としてみれば、貨幣はなお形態規定が主となっており、このことが外的にも貨幣の刻印をおびて現われている。鑄貨としてみれば、いっそうそうである。しかし第三規定においては、すなわち尺度であり鑄貨であるということが貨幣の機能として現われるにすぎない貨幣の完成状態においては、あらゆる形態規定は消滅している、すなわちそれは貨幣の金属存在と直接に一致している。そこでは、貨幣であるという規定がただ社会的過程の結果にすぎないということは全然みえていない。その存在自体貨幣なのである。」（『経済学批判要綱、第一分冊』、資本にかんする章の冒頭部分。

『資本論草稿集1』所収）

右の文章で注目すべきは、「金属存在」としての金のもとで、見えなくなっている「あらゆる形態規定性」に注意が払われている点である。「金属存在」の中に秘められた、貨幣性、が掘り出されている。貨幣性については、例え

ば次のような文章を見ることが出来る。

「貨幣商品の使用価値は二重になる。それは……その独自の社会的機能から生ずる一つの形態的使用価値を受けとるのである。」（『資本論』第一篇第二章）「一般的等価物として排除された商品は、……一般的交換手段であるというだけにとっても同一の使用価値をもっている。」（『経済学批判』第一章）「金の商品への転化にとつては質的制限はなにもない。」（『現金と引き換えならどんなものでも得られる。』）（『経済学批判』第二章、2のa）「しかし貨幣は、どんな欲求の対象にも直接に転換可能であるかぎり、どんな欲求をもみだす。貨幣自身の使用価値は、その等価物をなす諸使用価値の無限の系列のうちに実現されている。」（『経済学批判』第三章の3）「商品流通の拡大につれて、貨幣の力が、すなわち富のいつでも出動できる絶対的に社会的な形態の力が、増大する。」（『資本論』第一篇第三章a）「したがってまた、そこでは〔恐慌のさいには〕貨幣の現象形態がなんであろうとかまわぬ。支払に用いられるのがなんであろうと、金であろうと、銀行券などのような信用貨幣であろうと、貨幣飢饉にはかわりないのである。」（『資本論』第一篇第三章第三節b）

右の一連の所述を全体として見ると、貨幣金が、△価値物▽であり△労働生産物▽であることをふまえながら、その上に付与されている「貨幣の一般的使用価値」が注目されていることが知られよう。

つまり、「貨幣としての貨幣」を語るにさいして、これを△価値物としての金▽、△労働生産物としての金▽に解消してしまふのではなく、その△貨幣性▽が何よりもまず注目されねばならぬのである。

この点をケインズの思索の歩みとかかわらせていうと、次のようになる。ケインズは、「事実上、金本位制はすでに未開社会の遺物」（『貨幣改革論』第四章）と考え、「呪うべき黄金欲」（『貨幣論』第三章）を問題にし、「好むと好まざるとにかかわらず、『管理』通貨は不可避」（『貨幣改革論』第四章）としたのであった。問題は、自然物たる黄金につい

ての「呪うべき黄金欲」と絶縁をはかったとしても、なお資本主義市場経済であり続けるかぎり、W—G—Wの内包する分断の可能性は消えるわけではなく、「黄金欲」に代って「貨幣欲」は残り、「流動性プレミアム」の問題は依然として残るといふ点にある。

そこで、以上をふまえつつ、直截に退蔵貨幣の特質を問題としてとりあげよう。退蔵貨幣には、次のような三点にわたる特質があり、これらの特質は、貨幣制度としての金本位制度を考察するに際して重要ないみを持つ。

第一は、その無内容性・無概念性である。退蔵貨幣とは、流通の外部において退蔵される貨幣である。流通過程の外部にあって流通手段たることを止めた貨幣、つまりは流通の否定態である。すなわち、流通の「外にある」貨幣、流通必要量の「外にある」貨幣、流通の「否定態」——こうしたネガティブな規定は、要するに残余としての消極的定義であって、定義自身の中に何ら積極的な意義を含むものではない。空疎にして無内容な性格のもの、と見てとることができよう。

第二は、その雑多性・雑炊性である。退蔵貨幣の中味は、実に雑多である。まず、それ自体を目的として金を埋蔵し、審美的に金銀製品を退蔵するなど、黄金欲の所産としての退蔵貨幣がある。かと思うと、当面使途を見出すことができないという消極的に余儀なくされた退蔵がある。或いは、購買の準備金として、債務支払のための支払手段の準備金として、などのように交換過程の必要が生む退蔵貨幣がある。多様にして多彩なものが包含される点が第二の特質である。⁽¹⁰⁾

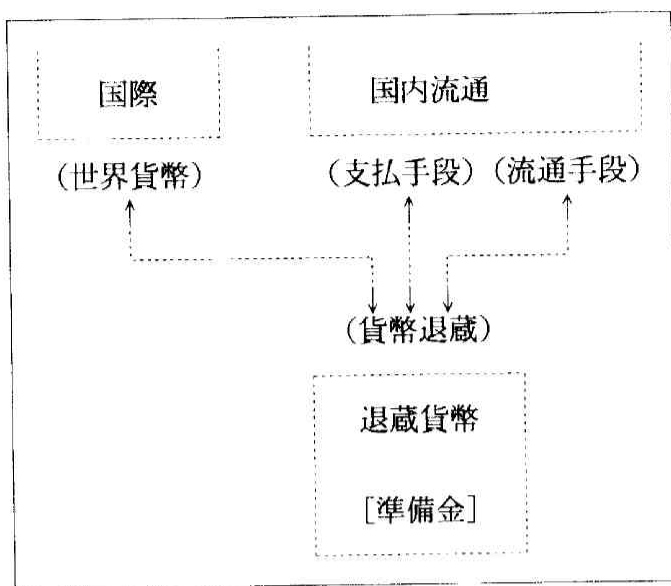
第三に、その運動の方向性は予測困難であって、そこに自律性や収斂性を求めることはいちじるしく困難である。これについては次節で触れる。

だから、問題は、こうした無内容にして雑多な存在である退蔵貨幣が、なにゆえに「貨幣としての貨幣」たりうるか、このところにある。こうした無内容にして雑多な存在が、商品流通にとって決して意のままにはならぬ絶対他者Ⅱ超越者たりうる理由、つまりはその呪物性の根拠が知りたい。

この退蔵貨幣にみられる無内容にして雑多な性状を軽率に嗤うことはできない。理論の位相をこえて遠望すれば、かの「貨幣資本蓄積」の正体は、「無内容なる貨幣の沈澱」であった。「無内容なる貨幣の沈澱」に「貨幣資本蓄積」なる重い規定を与えたもの、それは再生産の総体であった。

かくて、この雑多にして無内容なる退蔵貨幣に、「貨幣としての貨幣」なる重い規定を与えるものは、商品流通 $W-G-W$ の総体を措いてほかにはない。だからこそ、この部分の表題は「貨幣または商品流通」とされていたのである。商品流通 $W-G-W$ の総体の認識、これについては既に述べた。 $W-G-W$ を、 $W-G$ と $G-W$ とへの分断の可能性の下に理解することが、「貨幣としての貨幣」に至りうる唯一の道であった。

すなわち、流通貨幣は、 $W-G-W$ というヨコの世界に住む。しかるにこの $W-G-W$ が、たえざる分断の可能性にさらされていることから、この過程的運動の外化した姿として、「貨幣としての貨幣」を生ぜざるをえない。そして、これよりのち、流通貨幣は、この外化されて生じた「貨幣としての貨幣」とのタテの関係においてしか自己を確認することができない。かくて「貨幣としての貨幣」は、商品流通の総体を眼下に見て君臨する。退蔵貨幣は、 $W-G-W$ の分断可能性にわずらわされることのない存在、 $W-G-W$ なる修羅場を超越した存在、つまりは \wedge 超 $W-G-W$ の存在として、至上の善になる。それは元来、 $W-G-W$ から外部に排出され、舞台から退場した否定態であるが、その出自如何はすでに問われることがない。むしろ、流通の $W-G-W$ において、 \wedge いつでも、どこでも、何にでも \vee 買い向える不動の存在として、つまりは決して揺らぐことのない存在として評価される。「貨幣としての貨幣」



とは、直接的には自然物としての金であるにしても、それは、 \wedge 価値物としての金 \vee に担われつつ、貨幣の一般的使用価値が自立化した姿として認識さるべきものである。そしてその支配力のエネルギーは、「貨幣」に本来備わっているように見えるものの、実は貨幣経済の総体から、つまりは「商品流通」の総体から吸い上げられたものである。

(9) 産業循環の過程は、それ自体としては「貨幣資本蓄積と現実資本蓄積」の問題であるが、これを貨幣論次元に縮約表現するとき、次のような論点が生じる。

すなわち、循環過程における貨幣と商品とを、いずれも「価値物」とおさえ、両者の間に不等価交換が生じるという理解に立って循環を説明する場合がある。好況局面では、商品が飛ぶように売れて価格上昇し、騰貴した価格でも売り捌くことができる。こうした場面では、商品の過高評価の裏側で、貨幣の相対的価値は低下する。逆のことが不況局面で生じる。商品は売れず、価格は低落する。商品が過小評価されるのに対し、貨幣は過高評価される。貨幣の相対的価値は上昇する。

しかし、単なるシーソーのような不等価交換をもってしては、あの鋭角的な変化を含む恐慌を説くことは出来ないのではないか。例えば数学でいう正絨曲線サイクリックのような変動までは得られたとしても、それは単に市場価格変動の自己修復性・自己回帰性をシンメトリーに説明するだけのことであって、恐慌を説明する装置としては不十分なのではないか、そしてその根底には、商品と貨幣とをシンメトリーなものと位置づける古典学派的思考がかくれているのではないか、これらの点は、尚吟味に値する課題である。

(10) 「貨幣としての貨幣」における退蔵貨幣の位置について確認しておきたい。「貨幣としての貨幣」の中には、退蔵貨幣、支払手段、世界貨幣という三種のものが含まれている。これらの間の関係を整理した概念図を掲げておくと、上の通りである。

すなわち、概念図に従って説明すると、(一)、貨幣退蔵という行為によって、流通外に、否定態としての退蔵貨幣ストックが形成される。国内流通のみならず、国際商業からも、退蔵貨幣は形成される。(二)、形成された退蔵貨幣ストックは、或いは

流通手段として、また支払手段として、流通内に出動して機能し、或いはまた世界貨幣として国際商業などに機能する。流通手段も支払手段も世界貨幣も、機能態にある貨幣の姿であり、流量^{フロー}としてとらえられる。(三)、支払手段ならびに世界貨幣の後方には、支払手段準備金、世界貨幣準備金が、退職貨幣ストックの一部を形成する。(四)、かくて退職貨幣ストックこそは扇^{かまめ}の要、水源池の役割を果していることになる。以上につき、竹村脩一「貨幣の基礎理論」(高木暢哉・竹村脩一『貨幣・金融の基礎理論』、昭和四十三年、ミネルヴァ書房)一六九頁以下の所述を参照。

四 金本位制度の逆倒性

そこで、以上をふまえて、貨幣制度としての金本位制における「貨幣としての貨幣」の意義についてみることにしよう。

金本位制度というとき、①自然発生的に金地金などが秤量貨幣として用いられ、流通の内外の区別も判然としない原初的状況と、②商品流通にかんする流通についての内外の区別が認識されて、鑄造された金鑄貨が、国家法制の裏付けをえて流通貨幣として用いられ、或いは通貨供給機関としての銀行制度が整備される中で金兌換銀行券が銀行貨幣の中核として用いられるという状況とは、区別されねばならない。従来、金が価値尺度として機能するというだけの原初状況に戻した、極めて漠然たる観念の下で金本位制度が議論される傾向があった。ここでは、右の②のケースを念頭に置く。

すなわち、端的にいえば、金本位制度は、単に金が価値尺度機能を果す、というだけのことでは済まされない問題だ、ということの認識が重要ないをもつ。貨幣制度としての金本位制度の確立は、商品流通における内外の分別にもとづきつつ、流通貨幣と「貨幣としての貨幣」との関係性維持機構を不可欠の要素として伴うことを条件とするものである。

さて、貨幣制度としての金本位制度には、およそ三つの理論的位相がある。

第一に、根源的規定として、金が価値尺度たることを認め、これを本位とし、その上に立って価格の度量標準を定める。これは、資本制生産の根幹たる、私有財産制度と等価交換原則とを、貨幣面から堅持せんとする根本規定である。

第二に、流通手段としての貨幣、すなわち流通貨幣の基本を金鑄貨とし、法定貨幣 (legal tender) の定めを置き、これをもって最終決済手段とすることを規定する。あわせて通用最輕量目 (least current weight) の定めをおき、流通する金鑄貨の現実内容の維持をはかる。

第三に、加えて、①自由鑄造、②自由兌換、③自由輸出入、という三様の機構を伴うのであれば、金本位制度は貨幣制度として十全のものたりえない。そこで、これら三様の機構について検討してみよう。

これら三様の機構は、「貨幣としての貨幣」と「流通貨幣」との関係性を維持する機構であって、その関係性の維持には次のような二つの側面がある。

すなわち、(一)、流通貨幣を「貨幣としての貨幣」と結びつけることで、流通貨幣 (具体的には金鑄貨ないし兌換銀行券) の現実内容を名目内容と一致させようとする機構であると同時に、(二)、過程的運動たる $W-G-W$ の渦中から、何時でも絶対的富の定在たる「貨幣としての貨幣」に立ち戻りうる相互轉換経路の制度的保証機構でもある。(一)が、物価変動＝貨幣価値変動を受けとめる側面であるのに対し、(二)は、それを越えて、恐慌を受けとめる側面である。

これを流通貨幣の側に立ってみると、(一)、一方では、流通貨幣は「貨幣としての貨幣」の示すところに従って自らの内容的価値をたえず確認しつつ自らを律し、(二)、同時に他方では、 $W-G-W$ の破綻が予感されるや、「貨幣としての貨幣」のもとに身を寄せざるをえない可能性のもとにわが身を置く、ということである。

かくて、(1)自由鑄造〔融解〕（＝退蔵貨幣と流通貨幣との関係性維持機構）、(2)自由兌換（＝支払手段貨幣と流通貨幣たる銀行券との関係性維持機構）、(3)自由輸出入（＝世界貨幣と流通貨幣との関係性維持機構）、という三様の機構は、まとめていえば、「貨幣としての貨幣」と「流通貨幣」との関係性維持機構なのである。

さらに言えば、右の支払手段にしろ、世界貨幣にしろ、それらのための準備金は全て「退蔵貨幣」の形態において存在するわけであるから、それぞれの準備金に注目するなら、結局のところ、全ては「退蔵貨幣」と「流通貨幣」との関係性の維持に関わるもの、ということができ、退蔵貨幣との関連性が維持されることにおいてのみ、流通貨幣の世界が存立しうる、ということになる。この機構が、一切の例外なく一般的に妥当しうるものであることが保証されるのでなければ、貨幣制度としての金本位制度は成り立ち難い。

従来の説明の仕方は、一般に、これら三様の機構を「代用貨幣と地金との」転換機構と解し、もっぱら実体価値の有無、実体価値の維持という観点から説明するものであった。それはつまり、価値物と代用品との関係として、三様の機構を解するものであった。しかし、それは、既に見たように、ひとつの側面にすぎないのであって、不確定性に満ちたW—G—Wの世界と「貨幣としての貨幣」とをとり結ぶ機構という、いまひとつの側面をないがしろにしてはならぬのである。単なる「価値物—代用品」関係にあるのではなく、「流通外貨幣—流通貨幣」関係が重いみをもつことが注目されるのでなければならぬ。すなわち、単に△価値物としての地金▽が問題なのではなく、また他方、単に△代用貨幣▽が問題なのでもない。流通貨幣と流通外貨幣との関係性こそが重大な問題であることが知られねばならない。そうでなければ、以下に述べるような金本位制の意義と限界は視野に入っていない。

以上に示されたことを要約すれば、いまや「貨幣としての貨幣」との関係性が維持される限りにおいてのみ、流通貨幣は自己を確認することができる、ということである。即ち、好むときに「貨幣としての貨幣」に転ずることがで

き、またそこからいつでも「流通貨幣」に転じうること——この制度的保証なしには流通貨幣は成り立ち難いのである。この物象化された逆倒的構図において貨幣制度としての金本位制度を理解するの でなければ、金本位制度を真に理解したことにはならないのである。

その場合、最大の問題は、この「貨幣としての貨幣」の性状如何であり、それが住む居住空間の特質如何である。考えてみると、商品流通 $W-G-W$ の「埒」内であればこそ、一定の自律性や収斂性がとにかく語られえたのである。次元をかえていえば、再生産の枠内であればこそ、一定の自己更新性や秩序が語られえたのである。しかし、いま問題にする商品流通の外側の世界をくくるものは一切、存在しない。単に「非流通」、「非機能」というだけで、輪郭さだかでない「埒」外の茫漠たる世界、そこに住む「貨幣としての貨幣」は、その運動の動因や方向性やエネルギーを予測するさえ困難な「不埒」な存在、したがってここに自律性や収斂性を求めるなど、およそ不可能であり、また、流通貨幣の機能する商品流通界との一義的な連動性などがあるわけもないのである。これら諸点については、次の例示で足りよう。

(一)、「黄金銀欲 (Goldgier)」(『資本論』第一篇第三章第三節 a)、すなわち「呪うべき黄金欲 (auri sacra fames)」(ケインズ『貨幣論』第三五章)の問題がある。「貨幣蓄蔵の衝動はその本性上無際限」(『資本論』同所)で、しかもその審美的側面、「その美的な形態、金銀商品の所有」(同)は、およそ経済学の域をこえる問題である。ケインズは、『インドの通貨と金融』のなかで、インドにおける金退蔵を、「不毛の習慣」、「非文明的にして浪費的な慣習」とした。(二)、恐慌前後における金移動、金流出入は、国の内外に及び、瞬時にその居所は変わる。「近代銀行制度が金流出にたいして抱く恐怖は、貴金属を唯一の真実の富とする重金主義がそれにたいしてかつて夢想していたいっさいのものを凌駕している。」(『資本論』第三卷第二八章)(三)、戦争遂行のためや銀行の正貨兌換再開のための借入金、あるいは賠償金のように

な場合、直接に国民経済そのものとは関りのない次元で居所を変える。

かかる「貨幣としての貨幣」と流通貨幣との関係性を維持することをもってのみ、貨幣制度としての金本位制度は成り立ちうる。管理通貨制度というのは、或る意味で資本主義経済の自己組織化の一環をなすものであるが、そこへの転成の深因はまさにこの点にある。ケインズは、早期に「呪うべき黄金欲」をとりあげ、金本位を「未開社会の遺物」と断じ、金退蔵に依存せざるをえない制度を捨てて管理への道を模索し、「好むと好まざるとにかかわらず、『管理』通貨は不可避」としたのであった。

「貨幣としての貨幣」とリンクすることにおいてのみ維持される流通貨幣の世界、これほどの逆倒的構図は珍しからう。しかもその「貨幣としての貨幣」が、制御容易ならざる存在であるとするなら、金本位制度なるものが、放置して容易に維持される類のものでないことはすでに明らかである。ここに貨幣制度としての金本位制度の根本的困難があるのであって、ここにこそ早くも金貨本位制度の下にあって「貨幣政策」が必須不可欠のものとして登場せざるをえない理由があるのであり、またその「貨幣政策」が困難を極めるものたらざるをえない理由がある。貨幣制度としての金本位制度は、いわば「半管理状態」においてのみ存立しうるものにすぎない。

恐慌下では、至上の善、絶対的な富としての「貨幣としての貨幣」たる金に全てを託した形で、資本主義経済は維持される。一九世紀イギリスの具体的な機構に即していえば、中央銀行における金準備の存否消長に体制の命運はかかっていた。この金準備こそは、いかなる犠牲のうえにも守り切られねばならず、死守すべき金準備を託された貨幣当局の責務はきわめて重い。計り難い動きをする金準備、「貨幣としての貨幣」に死命を制せられているかにみえる資本主義体制、ここに商品流通によって直接に規定されることのない「貨幣としての貨幣」の位置が鮮明に浮び上ってくるのである。

五 む す び

金本位制度の逆倒性は、貨幣制度に本質的な逆倒性である。そうであるかぎり、それは「呪うべき黄金欲」を切り離したところで消えるわけのものではない。管理通貨制度といっても、市場経済であり続けるわけであるし、W—G—Wの分断の可能性はなくなるわけではない。したがって、「貨幣としての貨幣」をめぐる諸問題はなくなるわけがない。「流動性プレミアム」の問題は依然として残るのである。仮りに将来、電子マネーが構想される段階に至ったとしても、右の問題は残るに違いないのであって、そのことをふまえて将来の貨幣システムはデザインされる必要がある。何故に金本位制度が「未開社会の遺物」と評されねばならぬかは、改めて問われるべきであろう。少なくとも、金本位制度が自律的安定性において十全なものであったと言ひ難いことは事実である。

加えて、管理通貨制度の下にあって、かの逆倒性はいかなる意味を持ち、いかなる姿をとって現われるものかは、△管理されざるをえない▽この貨幣制度の制御可能性を問うに際して、重要な論点をなすに相違ない。また、管理通貨制度への歴史的転換によって解決しえた事柄、それに伴って新たに生じてきた問題、これらは稿を改めて論ずべき課題である。⁽¹¹⁾ (一九九六・八)

(11) マネーサプライ(通貨供給量)には、次のような二面性がある。すなわち、一方で、流通貨幣は、商品流通に被規定の存在として生じながら、同時に他方、商品流通に内在する本来的な不確定性から、外部に自立した「貨幣としての貨幣」の存在を予定し、またその統御の下に入ることによって、はじめて流通貨幣たりうる、という二面性である。この二面性こそ、現代におけるマネーサプライの内生性をめぐる論争の根源があるのであって、この論争の混迷は、こうした屈曲に満ちた商品・貨幣世界の構造を真に理解することの困難さを示している。